

卒業生による活動報告

群馬県立
近代美術館

平成18年度学芸員資格取得（お茶の水女子大学）

太田 佳鈴

群馬県立近代美術館について

平成28年（2016）4月より、群馬県立近代美術館の学芸員に採用され、勤務しています。近年、公立文化施設の民営化が進み、指定管理者制度を導入する館も増えていますが、当館は未だ県立館で、私達は群馬県の公務員でもあります。群馬県が管理、運営する美術館・博物館は5館で、当館のほかに館林美術館、歴史博物館、自然史博物館、土屋文明記念文学館があります。日本近世美術史を専門にしていますが、名称のとおり近代美術館であるため、分野を越えて、特に近現代の日本美術についても広くカバーしなければなりません。ちなみに現在は、若手作家を対象にした公募展、群馬青年ビエンナーレを担当しています。また、県職員であるために、1つの館に学芸員としてずっと留まることができるかは分からず、他の県立館や部署に異動する可能性も十分にあります。

当館は、昭和49年（1974）の秋、緑豊かな群馬の森公園の中に開館しました。すぐ隣には歴史博物館があり、両館開館時には連絡通路で行き来することができます。建物の設計は磯崎新によるもので、120cmを基準としたフレームの集合体が、展示される美術作品を取り巻く額縁のような空間として想定されています。展示室は1から7まであり、全体で3318.86㎡にもおよぶ、かなり広大な空間となっています。

設立の経緯には、高崎の文化人であり実業家であった井上房一郎（1898-1993）が深く関係しています。かつての井上工業株式会社の社長であった井



群馬県立近代美術館外観

上は、ブルーノ・タウトの招聘や群馬交響楽団の創設などをはじめとする高崎の文化活動・文化顕彰を担い、美術館設立にも尽力しました。その結果、「明治百年記念事業」の一環で、全国でも比較的早い時期に公立の近代美術館として開館しています。

収蔵品には、近代美術館でありながらも、井上が寄贈し、彼の号にちなんで名付けられた、日本と中国の古美術229点からなる「戸方庵井上コレクション」があります。ほかにもルノワール、モネ、ピカソなど海外の近代美術や日本の近現代美術、群馬ゆかりの美術など優れた2000点もの作品を収蔵・展示しています。講演会やワークショップ、ミュージアム・コンサートなど様々なイベントの開催や、ミュージアムショップやレストラン、茶室といった施設もあり、群馬県の美術の拠点の一つとして、総合的にミュージアム体験を楽しめるようになっています。

学芸員の仕事

私が学芸員という仕事を目指すようになったのは、実践女子大学大学院進学を機に、美術史という学問、研究の世界に関わる仕事をしたいと考えるようになってからです。大学はお茶の水女子大学文教育学部人文科学科に入学し、哲学・倫理学・美術史コースに進んで、東洋美術史を専攻していました。当時の先生がインド美術を専門にされていたこともあり、仏教美術を中心に学んでいましたが、興味があった日本近世美術、琳派について詳しく学びたく、実践女子大学の科目履修生になり、そして大学院に進学しました。大学院では、先生に連れて行っていただいた特別観覧で、初めてケース越しではない状態で作品を熟覧し、調査ができた時の感動が忘れられません。学芸員資格は学部で既に取得していましたが、最新の研究が反映された質の高い教育と多くの調査経験を得たことで、研究に関わる仕事をしたいという思いが強まり、本格的に学芸員を目指すようになりました。

大学院修了後は、江戸東京博物館で非常勤職員としてアルバイトをしたり、実践女子学園（現在は実践女子大学）香雪記念資料館学芸員・実践女子大学博物館学課程助教として、5年程勤めました。私は実践女子大学博物館学課程の卒業生ではありませんが、博物館実習や講義の一部に関わり、教える立場となった経験は、自分の知識や技術を見つめ、学び直す良い機会だったと思います。他の例と比較しても、梱包実習や学芸員経験者による講義など、実践の博物館学課程の指導は非常に丁寧で、かつ即戦力となる現実的な指導だといえます。ここで学ぶ皆さんにはぜひ貪欲に知識と技術を吸収し、できる学芸員として活躍してもらいたいと思います。

卒業生による活動報告

そして現在、学芸員になって8年目になりました。研究はあまりできませんが、作品のすぐ側で対峙できること、そして美術館・博物館という組織での経験は、自分のキャリアにとって大事なことだと考えています。

ところで、学芸員の仕事とはどういうものでしょうか。美術館、博物館を運営していく中で、館に関わる仕事は多岐にわたります。展覧会などの学芸的な業務が目立ちますが、ワークショップやイベント、ボランティアの統括といった教育普及的な業務、館の予算や運営に関わる事務作業、メンテナンス作業など総務的な業務もあります。むしろ殆どの仕事はお客様から見えない部分であるとともに、当館のような館は建物などのハード面でも、運営や人材などのソフト面でも規模が大きい分、より多くの人々によって成り立っていますし、日本の場合、欧米の分業化された学芸員とは違って、そうした様々な業務に学芸員が関わり、兼務することは当たり前です。展覧会業務や研究ばかりが仕事ではなく、多岐にわたる業務の橋渡しを行ない、館全体を広い視野で把握する意識が必要になります。

展覧会業務

そうした様々な業務の中で、やはり一番花形なもののは展覧会業務でしょう。年間、常設のコレクション展示のほかに、テーマを設けた企画展示を4つ、やや規模の小さい特別展示を1つ開催しています。実現可能な予定として将来5年間ほどの計画を立てて進めていますが、予算の削減が続いているため、遠方からの借用や半期での展示替、仮設ケースの設置といった作業は難しく、結果、収蔵品を最大限活用して、入館者数および入館料収入の増加を目指す企画が多くなります。それも単なるコレクションを活用した名品選ではない、工夫を凝らした内容が求められるのです。

私も着任早々に、当時の館長の発案によって日本美術の展覧会の企画案を求められ、昨年度の夏、「日本美術のスヌメキーワードと巡るぶらり古画探訪」を企画、運営しました。近年の高い人気の

一方で、高尚だと敬遠されがちな日本美術を、収蔵品中心にわかりやすく紹介し、気軽に楽しめる展覧会にすることを目的としたものです。例えば、「屏風」「六曲一双」「たらしこみ」「水墨画」といった名称、形、数え方、技法や表現に関する専門用語をキーワードとしてあげ、実際の作品とともに解説することで、視覚的にも知識的にも、鑑賞を深めていただくことを目指しました。準備期間は約半年ほどで数々の制約はありましたが、高く思われがちな敷居を下げるのではなく、間口を広げることを重視し、お客様に様々な日本美術のたのしみ方を提案する機会をつくれたのではないかと思います。

おわりに

学芸員という職業は、残念ながら決して安易にお勧めできる職業ではありません。そもそも正規職として就業できる可能性は低く、また仕事内容も必ずしも専門にあったものではないこともあります。仕事量は多く、求められる成果には厳しいものがありますし、行政の文化政策や民間の文化事業に対する視線も決して温かいものではありません。

それでも私が学芸員になり、続けている理由は、やはり美術が好きだからにほかなりません。作品やその歴史が好きで、将来的にその価値を世に伝え、残していくことにやりがいを感じているからです。辛い時間もどんな苦勞も、その少しのやりがい、乗り越えられることが多々あります。

現在、急速なデジタル化や人工知能の発達、学習ニーズの高まりといった社会の変化を受けて、美術館・博物館の役割も変化し、それぞれの地域の中で求められるものは多種多様になってきています。また、教育と同様、数値で計ることができない価値や可能性がこの分野にはあるとも思います。将来、美術館・博物館が人々や社会にとってどういう存在となっていくのか、我々、学芸員も活躍の仕方や場はもっと多様化し広がっていくように感じています。日々の仕事の中で、得ることができた人脈や知識、そして経験を生かして、一人の学芸員として確固たる強みを持てるよう努力し続けたいと思っています。



日本美術のスヌメ バナーサイン等



日本美術のスヌメ 展示風景